
私たちは平和ボケに陥っていないか

(矢作征三、巨大災害に立ち向かうニッポン、パピルスあい、東京、2015、p.30-39)

2016年6月10日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

【概要】

本論文は災害大国日本における災害への危機意識の必要性を説いたものである。

【災害への危機意識の不足とその原因】

近年でも、H28年熊本地震、東日本大震災、新潟中越沖地震、阪神淡路大震災と、大きな災害は少なくなかったが、被災地以外の人たちは相変わらず平穏な生活を営み、時間の経過とともに次第にその自然の猛威について忘れ去ってしまい、被災地の復興に対する関心も次第に薄れてしまうのが常である。誰でも、被災現場を見る、被災者の体験話を聞く、また、復旧・復興作業に何らかの直接的なかかわりを持って、みる、感じる、など災害を直接に体験していないとやむを得ないことなのかもしれない。

自身の恐怖感や被災の体験の伝承が難しい背景に、人間の寿命と地震発生の時間的差の問題がある。関東での地震発生は静穏期と活動期が交互に入れ替わり、現在はその活動期に当たる。この活動期と活動期の間人間では2～3回の世代交代があり、親から子へ、孫へと伝承することは難しい現実がある。

【どのようにすれば地震への危機意識を持てるのか】

災害に遭遇した実体験を持つ人は地域に限定され、経験のない人々は災害や非常時に対して無意識、無思考状態に陥り、平常時から非常時に切り替える心理的スイッチが入らない状態に近いのではないかと考える。その能力を養うには個人個人が疑似体験を積み重ねて学ぶこと以外にいい方法はない。

現在行われている災害発生時の訓練は、学校・職場・地域での避難訓練が主であるが、近年では静岡県を中心に避難所運営ゲームHUGが行われている。市民に実践している防災対策について聞くと、「備蓄品を用意する」「非常用持ち出し袋を用意する」「避難場所を確認する」などが上位に上がり、他力本願的な状態がうかがえる。住民の多くが指定避難所に避難したらどうなるだろうか？ 施設はそれだけの人を収容し支援する余力は本当にあるのか？ 支援物資は？ 火災が起こった場合はどうするか？ 自分たちの面倒は自分たちで見なければならぬことに、こうしたシミュレーションは災害前に気づかせてくれるだろう。

【形骸化している防災訓練】

これまでの訓練の多くは、予定された時間に必ず責任者がいて、必要な指揮を執り、必要な資機材もあらかじめ用意され、各参加者は何分後に何を実施するか決められており、何分後に火災発生、初期消火、避難誘導など、あらかじめ定められたシナリオに沿った行動が行われている。このような訓練では、次のような問題点が指摘されている。

- 参加者が固定化し、参加意識も低く、形骸化している
- 訓練のねらいが不明瞭である
- 訓練回数が少ない
- 勤務時間中の訓練で、夜間帯での訓練をしていない
- 訓練シナリオに沿って行動しているだけである
- 電気、通信等が停止した想定訓練はしていない
- 訓練の実態とマニュアル等とが合っていない
- 訓練で得られた教訓等の記録や、改善がされていない

こうした「シナリオを読み上げる訓練」または「シナリオに沿った行動訓練」を繰り返し行っても、実際の災害にはあまり役に立たない。災害は訓練で想定していた通りに発生するのではなく、想定しない事態が発生することが多いからだ。

より実践的な訓練の実施に当たっては、訓練目標を達成するため、実施する訓練項目と訓練の流れを定め、次に、実施場所、訓練に要する時間、訓練参加者、使用する資機材を定める。次に、訓練項目ごとに、参加者の役割分担、大まかな動きが分かるような訓練プログラムを作成。その際、参加者の発言を記した詳細なシナリオは作成せず、訓練参加者に、自らのような行動をとるかを考えてもらうことが重要。

シナリオがない訓練では、次から次と起こる想定外の事態に対し、参加者があわてふためいたり、どうしてよいか分からなかったりして、多くの課題が明らかになる。実際の災害時における失敗は命取りになる可能性があるが、訓練ではいくら失敗してもそれが後々役に立つ。想定外の事態が起こった時にどのように行動したらいいのかを理解し、失敗しながら覚えていくことが大切である。多くの失敗例や問題点が明らかになる訓練が、良い訓練といえるだろう。

参考文献

「私たちは平和ボケに陥っていないか」矢作征三

「リスク対策.com」本誌 2014 年 11 月 25 日号 (Vol.46)

静岡県地震防災センターHP

<http://www.pref.shizuoka.jp/bousai/e-quakes/manabu/hinanjyo-hug/index.html>